



研究のオリジナリティと書道

■はじめに

さて、私は2009年7月に行われた第10回APRU博士課程会議に参加したわけですが、その感想を一言で申し上げると、「非常に有意義な時間を過ごすことができたと感じております。もし、参加を検討されている方がいらっしゃいましたら是非参加されることをお薦めいたします・・・。」といったところですが、このような一般的な言葉(かつ、このタイトル!)で簡単にまとめられてしまっはこれから参加してみようかと悩んでいる多くの学生の皆様にとって参考となる報告レポートにはならないと思いますので、主なイベントごとに、それぞれの良かった点だけでなく悪かった点も含めてお話ししたいと思います。

■参加学生による研究発表

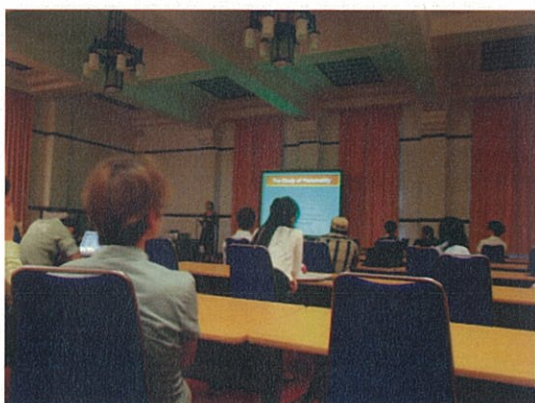
参加学生による研究発表は、発表時間15分、質疑5分。当初、知らされていた発表時間と異なっていたため戸惑う学生も多く見られました。学生は様々な分野から参加しているため、セッションの分野が多岐にわたり(HumanitiesからMedicalまで約15分野)、どちらかというところと広く浅い発表という印象でした。自分自身の発表はというと、所属が工学系研究科ということで研究テーマが誤解されており、異なる研究分野(自然科学、工学セッション)での発表となり質疑がほとんど出ない等といった課題がありました。しかし、世界レベルの博士課程の学生の発表を体験することが出来たこと、英語論文執筆・発表のよい機会となったことは良かった点として挙げられると思います。ただ、参加者の専門分野の偏りがあり、セッションによってはあまり聴講者がいないといった会場もあり、少し残念でした。

■グループディスカッション

今回のテーマである”Promoting Originality and Diversity in Research”について、ランダムに割り振られたグループ(10名前後)で議論を行い、最終日に成果発表を行いました。私のグループは、従来のパワーポイントスタイルの発表ではなく、オリジナリティという視点からトークショースタイルでプレゼンテーションを行い、最優秀賞(1st prize)を頂きました。分野も国籍も違うメンバーと英語で議論することは非常によい経験となりましたが、「研究のオリジナリティとは何か?いかに推進するか?」という視点から見た場合、研究分野によって課題や方向性がかなり異なり、数時間の議論ではなかなか答えが出ず、最終的にはやや抽象的かつ無難な答えにならざるをえなかった点は残念でしたが、その課題の差や方向性の違い等が認識できただけでも大きな収穫と言えると思います。



【京都大学時計台】



【研究発表の様子】



【ポスターセッションの様子】



【懇親会の様子】

■ポスターセッション

本来は、参加学生全員がポスターセッションに参加しなくてはならなかったはずが、約半数～2/3のポスターしか掲示されていなかったためとても残念でした。スケジュール的にもAPRU学生委員会の委員選挙と懇親会の間に設定されていたということで人があまり集まらず、議論が十分に出来なかったのは大変残念でした。とはいえ、自身のポスター発表としてはインパクトを重視したデザインと、様々な分野の学生に理解できるようなキーワードを用いて作成したため、多くの方々に集まっていた（20人程度）。その上で、的確なご意見を頂き、様々な議論が出来たことは有意義であったと思います。

■ソーシャルプログラム

①日本の文化

3つのイベント（書道、茶道、清水寺）から各自の希望によって選ぶことになっていた。私個人としては清水寺を希望していたが、海外からの学生を優先するとのことで、書道になった。しかし、これがまたおもしろかった。小学生の時に何度もやらされた書道だが、改めてやってみるとなかなかうまく書けなくて奮闘した。京都大学の書道部の方々から丁寧に指導頂いてとても想い出深い時間を過ごすことが出来た。会の最後には団扇に自分の好きな言葉を書いて皆に説明するのだが、私は自分の研究テーマである「開発協議」と書き、説明したが、やっぱり分かってもらえなかった（笑）

②京都大学施設

天文台、防災研究所、サスティナブル住宅の3つの施設から各自希望の施設を見学。私はサスティナブル住宅を見学しました。

■基調講演、特別講義

チンパンジーの研究で有名な松沢先生の講演は、内容はもちろんのことプレゼンテーション自体も非常に素晴らしく、質疑の中でも熱い議論が行われ、大変心に残る講演となりました。一方で、最終日の久保田先生の講義では、ご自分で作詞されたベニクラゲ音頭をカラオケで歌われるなど、会場も非常に盛り上がりました。やはり、自分の研究対象をここまで愛することが出来る様にならないと一人前の研究者とは言えないのだなあとしみじみと感じました。

■さいごに

今回の学会では、普段交流の無い分野の方と色々お話が出来たことや、他大学の博士課程学生の状況等を聞くことが出来て、とても有意義な時間を過ごせたと思います。私の場合、運良くホテルの同室者の方（早稲田大学）ともうまく打ち解けることが出来て、東京でもまたお会いして近況を話し合うなどの機会を持つというお話にもなり、新しい知人が出来たという事もこの学会に参加して良かった点の一つであろうと思います。なお、この場を借りまして、今回この会議を主催していただきました京都大学、並びに京都大学職員の方々、APRU実行委員の方々、京都大学書道部の方々、そして、様々な事務手続きをしてくださった東京大学本部国際系学生交流企画グループの職員の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。



【団扇（筆者書）】



【書道セット】



【プレゼンテーションの様子】

■主なスケジュール

【1日目】	基調講演（松沢 哲郎先生） グループディスカッション
【2日目】	参加学生による研究発表（その1） ソーシャルプログラム（日本の文化）
【3日目】	参加学生による研究発表（その2） ポスターセッション 懇親会
【4日目】	参加学生による研究発表（その3） ポスターセッション ソーシャルプログラム（京都大学施設）
【5日目】	グループディスカッション発表会 特別講義（久保田 信先生） 表彰式



【書道選択全員でパチリ】



【表彰式の様子】

APRU（環太平洋大学協会）第 10 回 博士課程会議 参加報告

東京大学大学院 総合文化研究科
博士後期課程 3 年

2009 年 7 月 6 日から 5 日間にわたり京都大学で開催された、第 10 回 APRU（環太平洋大学協会）博士課程会議に参加した。環太平洋地域の 16 か国（地域）42 大学の加盟校からの参加者の研究分野は人文科学・社会科学・自然科学と多岐に及び、” Promoting Originality and Diversity in Research” という今回のテーマのもと、活発な学術および文化交流が行われた。

会議期間中の主要な学術活動は、各自の研究成果のプレゼンテーション及びそのポスターセッションである。私は、『Economic impact of the emission credit system in Japan: an applied general equilibrium analysis』という題目で、温暖化問題解決のための国内クレジット制度の有効性について発表した。参加者の研究分野が多岐に及ぶため、専門分野が異なる聴衆へのプレゼンテーションを心がけなければならない。そういった経験はこれまでになく、自分の研究内容を限られた時間内で理解してもらうためには何をどの程度話せばよいのか、どのような質問が予想されるか、それに対してどのように答えるか等、発表準備段階で考えなければならないことは少なくはなかった。しかし、そういった準備段階が研究内容を客観的に再構築する機会となり、自身の理解をより深めることとなった。実際の発表は、会場のフレンドリーな雰囲気と活発な議論のもとに非常に楽しく有意義なものであった。さらに、他分野の方々からの質問・意見は意外ながらも有益なものが多く、柔軟な思考の大切さにも気づかされることとなった。

それぞれの分野において第一線で活躍している研究者の講演も多数あり、他分野の研究発表を聞ける貴重な機会となった。どの講演も興味深いものであったが、個人的に一つ挙げるとすれば、松沢哲郎先生の「チンパンジーの心理および人間との類似性」に関する話は特に印象に残っている。

また、国内外の研究者が一堂に会するこの会議では、専門分野を同じくする参加者との意見交換も重要である。こうした議論は非常に有意義であるとともに、志を同じくする国内外の学生の存在は、大いに刺激となった。特に、私は地球温暖化というグローバルな問題を扱っているため、国外の研究者との議論は不可欠である。今回の会議では、

活発な意見交換にとどまらず、共同研究・執筆という段階まで発展した。これも、この会議に参加したことで得られた大きな財産である。

上記の学術的な活動以外にも“Social program”が日程に組込まれており、参加者同士が交流を深め、お互いの国の文化を知ることができる。今回のプログラムでは、①日本文化に触れるもの（書道、茶道、清水寺見学のいずれか一つを選択）および、②開催大学である京都大学の最先端研究施設（京都大学大学院理学研究科附属花山天文台、京都大学防災研究所、京都大学生存圏研究所のいずれか一つを選択）の二つに参加することが可能であった。なにより、海外からの参加者に古き良き日本文化を少しでも理解してもらうためのきっかけとなったのではないだろうか。また、日本からの参加者にとっても、真の日本文化に触れる滅多にない経験ができ、非常に興味深いものであったろう。APRU ならび企画・運営をされた京都大学の実行委員の方々のご尽力に深くお礼を申し上げたい。

上記の「学術的」及び「社会的」交流の双方を満たすプログラムの一つに、“Special Workshop”があった。参加者は10のグループに分けられ、今回の会議のテーマである『Promoting Originality and Diversity in Research』について、各グループ内でディスカッションを行った。具体的には、①研究における Originality とは何か、② Originality を阻害しているものは何か、③Originality を促進するために必要なこと、の三点に関してグループの意見をまとめ、最終日にプレゼンテーションを行うというものであった。プレゼンテーション上位3グループには賞品が授与された(1位は浮世絵)。このようなプログラムは、APRU 学生会議の歴史の中で、今回が初めてであるという。参加者の専門分野が多岐に渡っているなかで、分野を問わず共通するテーマに関して議論することは、様々な思考方法を垣間見られるような非常に魅力的な試行であり、今後各自の研究遂行の大きな力になることだろう。

研究を進めるにあたり、国際的な経験は不可欠であると常々認識しているが、そのための経済的負担は学生にとって非常に重く、研究活動における大きな心配事の一つといっても過言ではないかもしれない。参加費・宿泊費等の経済的な心配もなく、国際会議への参加を可能にする APRU 博士課程学生会議は、学生にとって大変有難く、研究を行ううえでかなり大きな支えとなっていると確信する。APRU をはじめ、今回の学生会議に携わった皆さんに感謝の意を表したい。

Conference Report

10th APRU Doctoral Students Conference

Promoting Originality and Diversity in Research

July 6th (Mon) - 10th (Fri), 2009

Clock Tower, Kyoto University, Kyoto, Japan

Department of Mechanical Engineering

The University of Tokyo

1. Introduction

The Association of Pacific Rim Universities (APRU) is found in 1997, and is a consortium of 42 leading research universities in the Pacific Rim. The consortium aims to foster education, research and enterprise thereby contributing to the economic, scientific and cultural advancement of the Pacific Rim.

The APRU Doctoral Students Conference (APRU DSC) is the primary event organized by the APRU Doctoral Students Network (APRU DSN). The DSC aims to bring doctoral students in the Pacific Rim together for intellectual and social interactions. The papers presented address a range of topics grouped under an annual theme. Since the year 2000, 10 DSCs have been successfully organized in Universities across the Pacific Rim.

The 10th APRU Doctoral Student Conference, held on July 6-10, 2009 at Kyoto University is under the theme of “Promoting Originality and Diversity in Research”.

2. Some Activities

2.1 Opening Lecture by Prof. T.M (July 6)

Prof. M's research is about the chimpanzee intelligence both in the laboratory and in the wild. Through his cognitive research of chimpanzee Ai-project over a period of nearly 30 years, he is probing the evolutionary origins of the mind and behavior of human, *Homo sapiens*.

2.2 Special Workshop (July 6)

We are divided into 10 groups to discuss what promotes or thwarts originality in research at universities. Our group got the points that originality comes from well understanding of basic knowledge; communication with other researchers is important; and financial supports are necessary.

2.3 My presentation (July 7)

The topic I presented is *Numerical Study on the Shape Oscillation of an Encapsulated Microbubble in the Ultrasound Field*. I got some useful comments at the Q&A.

2.4 Social Program (July 7)

We went to Kiyomizu Temple. The site visit gave us a chance to experience Japanese culture.

2.5 Reception Party (July 8)

We enjoyed the wonderful buffet dinner, watched the *nou* show, and communicate with PhD students from various universities.

2.6 Social Program (July 9)

We visited the Strong Earthquake Response Simulator and Boundary Layer Wind Tunnel Laboratory.

2.7 Closing Lecture by Prof. S.K (July 10)

Prof. K's research is about "immortal" medusa *Turritopsis nutricula* McCrady (a type of normal jellyfish) project is going on internationally, contrasting to an ephemeral jellyfish of *Eugymnanthea japonica* Kubota, the most evolved bivalve-inhabiting hydrozoa.

3. Some Thoughts

APRU give us a good opportunity to communicate with other PhD students from different universities and different countries. We make friends at the conference. We are given comments in the presentation. We get enlightenment during discussion. We practice English speaking through communication. Also, we are so lucky to listen to lectures about frontiers of researches.

4. Acknowledgement

First I would like to thank the committee of APRU for the organization of this conference.

Second, I would like to thank all hosting members of Kyoto University for their reception.

Thirdly, I would like to *Student Exchange Planning Group, International Affairs Division, University of Tokyo*, for their effort and funding to support my attendance this conference.

Finally, but not least, I would like to thank my supervisor for his advices to my research.

2009年7月6日から10日まで行われたAPRU博士学生会議に行ってきた。今年は日本の京都で開かれたため、移動手段や食べ物などについては、特に難しい点はなかった。しかし、6日から10日までのギッシリと詰まったスケジュールをやり遂げることはかなり大変だった。ここで、スケジュールの詳細を挙げることはできないが、毎朝九時から七時ごろまで、発表を聞いたり、ワークショップを行ったり、社会プログラム（文化、科学に関する重要なスポット訪問）に参加したりしていた。3人部屋だったので、朝6時には起きないといけない状態だったため、毎日夜になると、結構疲れも出ていた。しかし、このスケジュールの中で、たくさんの人々と交流ができるため、やりがいがあるのも確かである。勿論、このやりがいは自分がどれほど積極的に参加しようとするのか、どれほど積極的に人々とコミュニケーションしようとするのかによって、違ってくるので、次回参加しようとする人は、自分の発表だけでなく、人々との交流をも重要な目標としてあげたほうがより実りのあるプログラムになると思われる。では、以下、今年行われたプログラムについてもっと詳しく、3点でまとめて報告することにする。

まず、一番重要な「発表」について報告する。APRUでは100人ほどの人々が集まり、その研究分野もテーマも様々である。医学、物理、生物、機械の分野もあれば、歴史、教育、経済、地域学など、自分多様な分野の発表が予定されている。100人の様々な国から来た発表者たちは大きく経済、人文、医学、生物、経済、科学、社会学などに分かれられ、セッションごとに発表するようになる。例えば、9時から10時30分まで、法学、環境、エンジニアリングという三つのセッションが準備されているとすると、自分の発表がなければ、この中の一つのセッションに参加し、発表を聞き、質問したりするような形である。重要なのは、自分の発表以外にも多様なセッションに参加し、学問的な交流または見聞を広めることにあろう。しかし、自分の発表以外のセッションには参加しない人も存在し、日がたつに連れて、教室の聴衆が少なくなる傾向があった。10人ほどの前で発表するセッションもあるぐらいであった。強制的に全ての参加者がセッションごとに参加するようとは求められないが、「自分」が積極的に参加することで、全体的により良いプログラムになっていくことをみんなが共有できればと思われるところであった。

一方、セッションに聴衆として参加しても、まったく分野も違うし、英語という言語の問題もあるし、発表を理解しにくいという理由で出席しない人々もいた。まったく理解できないわけではない。（一部には、その他の理由で、自分の発表以外はまったく顔を出してない人もいたが、この点は確かに問題があると思う）それについて、一部の学生の中では全体的なプログラムの「テーマ」を絞った方がいいのでは、研究領域をもうちょっと狭くした方がいいのでは、と私的なコミュニケーションの中で飛び交わされたりした。しかし、個人的には広い分野の様々な発表を聞いたり、また多様な視点の人々から質問やアドバイスを受けたりする機会は普段ないのであるから、こういった発表機会はとてもよいのではないかと思う。問題は、発表をする「仕方」にあるように思われた。例えば、スライドもなく、淡々と自身

が準備したペーパーを読みあげる発表者や当研究の背景や位置づけもなしに、突然研究結果が出てきたりする発表など、聴衆は英語が母国ではない様々な国から来た人々であること、また様々な研究分野から来た人々であることが、まったく無視された発表もあった。この点で、次回 APRU 会議に参加しようとする人は自分の研究の背景や位置づけをまったく知らない人々の前で発表するという点を考慮し、発表を構成した方が良いと思われる。

最後に、社会プログラムについて報告したい。社会プログラムは発表と講義でギッシリ詰まったスケジュールの中で一つの休憩時間とでも見える。また、参加者の人々が互いに交流を深める時間とでも見える。しかし、本人が参加した社会プログラムは「お勉強」が中心であるプログラムだったので、少し失望したところもあった。例えば、災難予防プログラムに参加したが、主に地震とその予防についての「講義」が中心だったので、発表セッションとの違いをそれ程感じられなかった。来年行われる大学でのプログラムはまた違うかもしれないが、社会プログラムが「講義」というより、参加者達が一緒に何かを体験したり、交流できたりするチャンスを増やすようなプログラムになっていれば、と思うところがあった。しかし、ここでもやはり積極的に人々と交流しようとする意志があれば、少しつまらないプログラムも面白くなると思うので、この点は十分意識してもらいたい。

以上、今年行われた APRU についてその様子と評価などについて述べてみた。私もたくさんの参加者の中で一人に過ぎないため、私の見方が代表的なものとは言い難い。次回の APRU に参加しようとする人々に何か少しでも役に立てればという希望と、これから APRU がより発展できればという希望を持って、ここで本報告書を締めくくりたい。

APRU の博士課程学生会議参加報告書

平成 22 年 9 月 10 日

所 属 工学系研究科機械工学専攻
職／学年 博士課程 2 年

参 加 事 業 名	第 11 回 APRU 博士課程学生会議		
開 催 場 所	インドネシア大学	開 催 国	インドネシア
派 遣 期 間	平成 22 年 7 月 11 日（日）～7 月 19 日（月）		

（成果概要）

1. はじめに

自身の起源（私はどこに生まれ、何人の子どもとして育ち、今どこに暮らしている）を日常に意識することなど、私には皆無に等しい。しかし、彼らは自身の起源に誇りを持ち、それと向き合い、探究しているように見える。気がつかされるのは、如何に局所的な世界の中で育ってきたかということである。この環太平洋地域には、日々爆発的な経済発展の渦中にある国、欧米の（ひいては日本の）植民地としての歴史を持つ国、移民によって成り立つ国、近くにありながら、全く異なる歴史、文化、社会を有する国々が、存在するのだ。

2. 渋滞はネットワーキングの時間

ジャカルタ市内から少し離れた、Depok という町にある。渋滞がなければ、宿泊した市内のホテルから、黄色とグリーンの可愛らしいデザインのスクールバスで、大体 40 分くらいの道のりである。しかし、さすが人口密度の高いジャカルタ、かなりの場合において、渋滞に引っ掛かる。そこで、バスの中は完全にネットワーキングの時間となる。会期中すべての移動はこのバスによるものであったが、その間にどんなにかお喋りの時間ができただろうか。（それを知ってか知らずか、バスの座席は通常と異なり、コの字型の座席になっている）「渋滞はネットワーキングの時間」会期中において学んだ一つのエッセンスである。



インドネシア大学のスクールバスと移動の様子

3. 広大な敷地とロマンチックなシンボル？

渋滞を経て、到着するインドネシア大学は、およそ 320 ヘクタールにも及ぶ広大な敷地の中にある。従来はジャカルタの中心部にあったキャンパスを、学生運動を機に政治の中心部から少し離れた **Depok** の町に移したそうである。広大な敷地ゆえ、学内は、先ほどのスクールバスが行き来しており、学生の足となっている。また、学内には専用の自転車が建物毎に用意されており、学生は自由に学内を乗り捨てできるようになっている。これは、少しでも環境に配慮するために、現在の学長が始めた取り組みだそうである。敷地内で、最も「ロマンチック」な場



学内専用の自転車
学生は自由に使える



TEKSUS Bridge
工学系側から撮影

所として、紹介されるのが「**TEKSUS Bridge**」である。湖をはさんで対岸にある、工学系と、人文系の校舎とを結ぶ橋である。工学系には男性が多く、人文系には女性が多い。その間を結ぶ橋であることから、この橋は出逢いの橋として、学内で脚光を浴びているそうである。私には、緑豊かで広大な敷地だからこそできる、非常に贅沢な橋と感じられた。(ちなみにつり橋なので、大人数(参加者全員)が渡ろうとすると少々揺れる)

4. 母国のための研究？

本会議では、学生の研究発表がとても特徴的であった。少なくとも、これまでの国際学会で感じたことのないものを感じとった。それは、かなり多くの場合において、各人の研究テーマに、その人自身の起源が密接に関わってきているのである。例えば、私のチームメイトは、**University of Southern California** の学生であった。彼女は、ベトナム人の両親のもとに生まれ、ベトナム戦争の後、アメリカに移住し、アメリカ国籍を取得したと話していた。その彼女の研究テーマは、やはり、ベトナムを意識したものになっていた。他にも、イランから **University of Malaya** に留学しているという学生の研究テーマもやはり、自身の母国を意識したものであった。少なくとも、彼らは、自分の生まれた国に対して、何らかの探究心を持ち、さらにはその国の発展のために、研究を進めているのであろう。一方で、私が日本を殊更に意識することがないのは何故だろうか。そんなことを考えさせられる研究発表の場であった。

5. 何のための研究か？

上記の感じた問いに対して、帰国後、周囲の様々な人と議論した。そして、得た回答が「我が国はすでに、我が国のために尽くす段階を超えたのだ」というものである。では、何のために、我々は研究をなすべきなのか、回答は至極簡単なものであるが、

我々は、アジアのため、世界のため、人類他すべての生命のために、研究をすべきなのだろう。

近くにありながら、全く異なる歴史、文化、社会を有する国々の学生を見て、私が新たに感じたのは、我が国のためだけでなく、地球全体のために研究をするべきだということである。少なくとも、この環太平洋地域において、我が国に求められる役割は、もはや他国と競争し、蹴落としての成長ではなく、他国の発展を補完しつつ、共に成長する姿勢ではなかろうか。日本という局所的な中で育っているにも関わらず、我々が殊更に我が国を意識しなくなったのは、きっと、そのような姿勢を求められる段階までに、豊かな国になったのだということだろう。

数十年後、写真の中の彼らは必ずや自国を牽引する立場になるであろう。私は、そんな彼らを相互に結ぶ立場になりたいと思う。



参加者とともに

Travel Report

Department : Environment Systems
Graduate School : Frontier Sciences

Paper Presented : Ea
Event : *11th Annual Association of Pacific Rim Universities Doctoral Students Conference (APRU DSC)*
Venue : Universitas Indonesia, Jakarta, Indonesia
Date : July 12, 2010

Content:

The event was composed of doctoral students from various countries in the Pacific Rim and from the US with diverse fields. The theme of the conference was **“Research for the Sustainability of Civilizations: Past, Present and Future”** and participants were divided and categorized into five (5) sub themes that are as follows:

1. Social, Economic & Cultural Policy in:
Equality; Governance and Policy; Economics, Crisis and Culture; Poverty; Human Rights, law and Social Changes; Democracy; indigenous studies, new social movement
2. Climate Change & Sustainability Development
Sustainability Development and cultural practices; Climate Change; Population; Food Security; Marine Resources and Water Management; Energy & Environment
3. Spirituality & Identity
Faith Based Organization; Spirituality & Religion; Fundamentalism and cultural citizenship; Diaspora, modernity, secularism
4. Technology
ICT; Bio Technology; Technology consumption; Technology & Society, Green Technology, network society
5. Health
Infectious Diseases; Herbal Medicine; Nutrition

I was grouped in the 2nd sub theme and was appointed as the chair of the session that facilitates the presentation and discussion of the group. Furthermore, the chairs were asked to summarized and give comments on the presentations from their respective group which was presented to the whole participants during the last day. During the conference, we were scheduled to do presentations and attended lectures which were conducted by speakers from various fields but mostly tackled sustainability in researches and globalization. We also visited places such as Central Bank of Indonesia